慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	S・S氏
Sub Title	
Author	堀田, 善衛(Hotta, Yoshie)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1967
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.23, (1967. 2) ,p.338- 339
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	佐藤朔先生還暦記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00230001-0338

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

がつづけられ、時々警戒警報のサイレンがなるなかで、ランボウの詩に関する佐藤さんの研究発表をきいた記憶がある。

塾は遂に戦災にあい、私も家を焼かれて暫らく郷里に帰っていたころ、佐藤さんも奥さんと子供さんを連れて同じ新潟県に疎開され、私を訪ねてきてくださったことがある。思いがけぬ時、思いがけぬ所でお会いできた嬉しさは、戦時中であるだけに格別であった。汽車に乗るのも困難であったし、いつまたお目にかかれるかわからぬような戦争末期のことである。

戦争が終り、いよいよ学校の授業が始まった時、私が三ノ橋の予科で教えるようになったのは、青木予科長のご好意と佐藤さんのお力添えによるものである。上京するようにとの電報を受取り、私は再出発の決意をした。

その後、今日まで公私ともお世話になるばかりで、報いること少いのは慙愧にたえないが、佐藤さんが還暦を迎えられるにあたり、いささか過去をかえりみ、感謝の念を新らたにした。これからも、ますます活躍されるようにお祈りする。

S・S氏

堀田善衛

S・S氏のことを、あわてて書かねばならぬとは、これは悲しいことである。あわてて書くのでないのであれば、言うまでもなく、S・S氏などということではなくて書いたであろう。けれども、S・S氏について書くということ

にさえも、暮に〆切りというものがついてまわったり、当方にゆっくりと回想と考えとをまとめるためのひまがないという、そういう事態が襲って来ている。襲われている。

一九四一年三月二日刊行になる「悪の華」一巻は、いまも、そうして一九四一年三月以来、机について仕事をし、本を読む、そういうことが出来たときにはいつでも、私の机辺のどこかに置かれていた。いまもある。この長くも短くも思われる時間――すでに四半世紀である――、一冊の書物がいつも身近かにあったということを、私としてもやはりなおざりに思うことが出来ない。たとえ一年に二度か三度、あるいは五、六辺、あるいはまた年にほんの一度くらいしかひらいて見なかったとしても、それはそれとしてこの書物は、本というものになっているし、本は本来そういうものなのだ。

本ばかりを何十冊も、いや何百冊も出していて、しかも一冊として本として成立していないものばかりが出て来るという、奇天烈な時世に、S・S氏はやはり仕合せな生涯をもったといえるであろう。

そうして、私はまたS・S氏を、先生であるとも教師であるとも、ましてや某大学の教授であるなどとも、氏の教室に実際にいたときも、そこを離れてからも、一度も思ったことがないし、いまも思っていない。あくまで「悪の華」一巻の訳者であり、一人の先達であると思って来たし、いまもそう思っている。身近な先達であり、いつ出会っても心にいかなるわだかまりもさわりもなくて、氏の話を聞き、当方も話す。世に一番によい関係というものであろうし、そうあることが出来るということが、ほかならぬ氏の徳なのだ。誰にでも出来ることではない。

「悪の華」一巻以後、二十五年を経て、近くボオドレエル研究の総まとめが刊行されるということであるが、この研究を机辺にあと何年間置いておくことが出来るものであろうか。先生、お達者で。